



枇杷園句集後編

乾



枇杷園主朗先生

發句集

後編

癸酉春 新鐫

朱樹乃翁此句を慕ひ
て風月花鳥や星霜
移し去ると二十餘年を皇
々春のそと免つて病
床を訪ひ句集後編のあ
ましをよむにや翁その
たゞのたまふもあはれと

病舌根をき免て言語心か
よのせきとくふとくふ海ま
よしたの平して出てせし社
分利よ梨き先見ゆの
句ともお志るししてこのし
置ぬまの類を翁の門人
秋舉七七日の追福の日
師乃州稿を携来里予と

俱尔をこの利き世なり弘
り翁のまをさくく衆予も亦
同し意たきも其より聊
書くくてもくくわとす
于時文化九壬申秋
曙葺尔筆をくく

青い所 卓池

枇杷園句集後編卷之一

春

元日雪

入るる雪の面よ雪の松
七十の歳をむくして

月雪よりやふらねてそふの春

贈青阿坊

洛の雙林寺に法師青阿弥と臘月乃

夫より三つふや二十四日都をさへち出て大和
路より事さへしとよし遊み山ふをり日を
えゆまふよしといを能ん發句して見せ
しさんといひこしと頼るを おめこ出て
寅正月元日試筆

春の泊瀬うてたより一帯の花の春

梅

子のやうりうゑん能ん梅のさ

例借の艸木ふりさめ少梅のふ
こゑの香やいつと大艸の桑木を
景穢やふたもつた所てくめれを

菅神影前詠梅花

天満る香やあそとくゑのそ
刃艸庵より左ふり
心と琵琶湖上りたふ
梅の香や明日は新ら志賀の山

熟田踏歌

夜ふけのうらむ日よの柳をうらむ

題一

うらむ柳の枝一里を椿の柳

原かものつくせ路の島を

猿曳のうらむ柳の柳

鴛

うらむ柳の枝一里を椿の柳

うらむ柳の枝一里を椿の柳

箱根山

うらむ柳の枝一里を椿の柳

うらむ柳の枝一里を椿の柳

うらむ柳の枝一里を椿の柳

題鴛水滴

うらむ柳の枝一里を椿の柳

曉臺先生一周忌

寛政四年正月廿日曉臺大人より都
四條のふもとより大寺院よりあまそふ
葬りたしめ給ふやうに願ひの國古のいけ
孔洞仙寺と父母の墓所ありて側ふ大人の
名中ひかりを瘞してこのまゝに塚を築
たし追慕の紀念とすなむま年その
ころをいふに日よきとす
おとけいふに

何れとていふに
りふりよ其塚は清く草むす昔
は海にありて去年の葉の
中へ小鷺をたはる都邊の人
かたききたかよしおの

月よきやな春や都の草は露

柙

柳青しきふやいく日のさきを絶し

一村々川汲よあまれ柳うら

若菜

鶏の子は五門の菜の畠道

春雪

片芝や窪くぬる歌をぬる雪

鈴鹿山

雪ききし雨ふりしをぬる山

若艸

ワカ艸やとくしけし庵の鍵

朝のつゆをぬる誰々子そ春の雪

瀬戸素剛雀園記

雀のちみくとちをぬる素剛耳そ

さよくすをひやりぬるのさう入

西の小坂をくぐるに今も一軒ある
そ米洗へ小菘つめとあまのこ
あもしくて檐外にあてた社に
驚て篇とるに少とるちるに
庵の名を雀園と名へて人々雀園
とよみふふりさち

雉

雛月や 塘、あつれいまーれい

雨りぬくまーれいこかぬ
ふう草や雉子のけいむ人乃家

朧月

穢より社くれ月のひうう
出代

霞

舟人れひとるまにうら

二月

大空をり香のひよふを二月うま

ぬ月や入日の底をかく子香

春夜

ちまねぬ秋とさう路のほよむるふ

紅梅

おぬるりあきり猫のゆへへうま

春雨

春るや油のちちく宵のやと

帰雁

帰うまて居きや芦の二葉うま

凡月の文を失ふるを数いへそちくそや

うに西行上人の胃ふて人を作るまふい

あは人をうつとらむひまんと花さよふ

おきく啼て野道の色のくどめく日と

まきくつふまおふりうへふあやふ

人の骨は芽と出ぬもけり春風

寄居虫

かう来たて月も雲居虫のやより哉

病後二句

手車ふ垂て出うれとをるの存

ひよひ脱ぬ来両らけり衣

寝覺里

春月祐さ危の里を通りく

少年行

そ表の存駒のかけらをぶくハク

菜花

家の巻や志智の山越いくに

涅槃

叢寺や螢のあきくぬ涅槃像

燕

錫杖ノ一あきく出便軒のつをわく

桃

夜何うやや桃こく門ろ砂をり

壽老讚

何れその子とせら桃の一よと

上巳

山のふりふの軒何少雛の家

送羅城法師松島行脚

負ちれくろ夫芝坊といふ人何と今をサ

筆をみゆむうう尾張の國ふさよふ

てとせむも交り拵ぬ國ふ歸る

後と折るうより一信る文ふも年あふ

とてなますれを去筆の冬きうふ

息して拵この羅法師松島ふさよふ

と一ひひこそれぬ子もともりめれ

金の鳥さうめはる額ろ浪かさか

おととと老衰せ少がらくら余のうら

對面せしとておんせしやまほのうれとすは
さふらみあまをえくく〜原羅法師とてろ
おあふ流立のよそひあせせ〜れまは
一日枇杷園の盃をとつてわうれの言ひ
をば〜とてしは

こらお〜る〜るの二つなとを
花とあ〜る〜れ外よあ〜〜松島の松の
おあ〜る〜る月雪のく〜な〜か〜る〜る

妻舟の月よ〜〜大芝坊〜〜命あ〜る〜る

花

お〜る〜れ〜孫抱〜〜は〜る
〜〜〜〜〜も〜〜きぬさる良哉

午窓三回窓

お〜る〜るをば〜て父よ〜塚のよれ

七寺

朝の間やを思つて〜みきせし

まよふ星の晴ると雲のあはれなき

梅間亭

あはれなきわ人のあはれなき木間亭

長良里

しみもむらじまふあはれなき鶴籠

樹下三宿のまはる葉むきうてけりふき

閑をむきむき芭蕉翁のなほあはれなき

因もむらじまふあはれなきあはれなき渡の山踏

藤原の里ふか入

樂をむきむきあはれなきの藤原の里

あはれなきあはれなきあはれなきあはれなき

蕉翁乃句を自得して

色も香もあはれなきあはれなき眼鼻うか

き里やあはれなきあはれなきあはれなき

唐殿山

不川やあはれなきあはれなきあはれなき

屋根艸小鶏のふく日くらふうし

呼子鳥

柴の戸や扉してきつめおをひきとる

得芝の家側小西行堂を

建てるをよ返こひて

水瓜躰踏せりあのおりま菴うま

久米路の橋をから虫をまぬ

あつぬしてゆけとこいハ

山ふふや久米路の橋をこもるぞれと

蛙

棚をーやひよく艸りうく蛙

藁火焚をひよくとあふ蛙うま

笠寺やうまのりつう敷のぬきむしら

田螺

あつぬらるを事れつ田りれまひ住居

小町譜

懐きよのこころを秋人々付ふくは

暮春

明日何ゆといふ日も春の名残うら

本居大人跡をの暇日こは

伊勢のよへ帰るるを送て

松坂の松しる春のこころを

暇日花や灯のゆく浦乃山

枇杷園句集後編卷之二

夏

卯花

卯のふりて抜串をさよる垣根うら

若葉

柿核の壁りてえくるけり繁く菊

子規

何少明もさるるをけりおほほしく

わとくま 頃時や 表明の 飯の泡

木曾川

川船 やあへ へ 暮るる 河へ ます

酔歩

やも とも ます けり せを 阿弥 陀 笠

鶯亭 訪々 歌 寂

氣の 洩さ よろ とも ます 宵の ちと

無常 菩提の 種を うる えし 江口の 遊女

草の ちと ちと 吊ひ くる 岳 輅 羅 城 少 女 け

三法師 を ちと ちと

世を いと ちと ちと 江口の ちと ます

一雙 青眼 見山 見海

耳の ちと ちと ちと ちと ちと ちと

竹子

竹子 やま ちと 四 尺ら ます の ちと

伊勢の 神宮 小詣 ちと

世竹里棠よりおくら

真丸より神馬の肥る四月の暮

このよより黄より蚊屋より萌黄唯そのか
らぬをよといへば帰る法師泪をよひ
ぬ法師名ハ芸門信州諏訪の人俳諧より
拵より予より松把園より宿をよみか
かせよ
あつたおよりそれハか少てよよやまけ
い

いけよても坂屋より萌黄より月夜より

閑呼鳥

何よてよよよあより系よ

友よりた打より

庵のもの分て喰うたうんこと

百合

百合の香の衣をよよ山路より

孫中將實方々の墓よて枯野よ

うらふそ君と西行の旅られし芒を
みちおくの御宮一束お折とりて筆を
結せておくけり

夏草ともさむいふうらむおもひ
夏草

夏草や一際何ぞと何系ね
蚊

蚊らりや酔人の足り乾目さし

瀬戸山より在て三時既ふして帰路おつく
雷をうけ雨のうちおとす山川乃水聲
前後をせむ行先の川に只こゝろおぼし
かゝりして夫田川をりて夕陽をうらふ
照して中野蕭々あり

茨の葉もよもや胡たふのいのちを
苔花

灯とほそやきりきり苔の葉

其原よて

そよふやほら〜ら〜として苔は花
尾張を月口の影とともるし出〜秋来々
越の小口をとも見あとして月の首後海行
棹さして高丘の菊りさるるよむ飛禪の
大雪小春越〜てらめく香よ心を高く〜
〜〜〜枇杷園の美草小飯妙〜と
〜〜〜おん〜〜を〜〜つ〜

苔の茶中おぬえ〜めあ〜きよ

競馬

〜か〜り〜れ〜あ〜る〜玉〜ち〜る〜競馬〜

田植

ぬ、星の数を田うきの宵をかし
つらむうふか〜こ〜う〜き〜あ〜る〜田う植
日比柳系の温泉る〜河〜ま〜ら〜る〜う〜さ〜ら
端午あ〜り〜として硯の〜〜小菰粽をそや〜

も里て山川氏少おるまを湯入乃
人形ふらりてうれしうあふ具じ
きるを

日のおやあやめを驚のる

六日神原より少き形へ出る向溪路曲る水

聲人落を奪てゆらるそこー松何る

岩根ふ立ち

撫子より息吹ける雨向う那

張良瀬

雨をよこすも奇なり橋の上

長野峠

紫陽花より日の入る伊賀の境に

猿蓑塚

一ししれもや五月の雨の中

陽炎高し此處佛のうし流る岩屋何少

大なる不動尊を彫附さす此ふあらしきく繩を

もよおし入るるもよおし入るる
もよおし入るるもよおし入るる
もよおし入るるもよおし入るる

郭公ふくやふ鳥の侍よう侍

夏野

牛馬ろ一節つれな夏野うら

若竹

茶り酔てつる牛蕨の掃除うら

饑巢居

去年の夏列一人のふと一れ返帰来て
よとせでふ口のれんとすまふといつきの夏
相見んや水の月鏡のうけもうつらもゆを
又あふまてら悲一の侍も一れれハふの
一夜と子金ふりと数きて

あふふたふめさふふらハ夏れ月

水鶏

西瓜や水鶏啼寂のうらみの意

つやわろ水 鶴尺えきやうらうら

五月 西

さうらねり南天のそまおうるこく

五月 雨や朝ぞりさるあやめ

照射

折角と消うま照射とほり

鶉飼

おろしよの鶉 船のそま煙

かき消てふいと鶉のそま

寛政 戊午六月九日の日義濃路を経て

木曾ふ入ぬを言龍といふ其由く先を

妻籠といふといふいふいふおはえて

いふいふを行して木曾の坂といふい

つこいといふいふいふいふいふい

いふいふいふいふいふいふい

いふいふいふいふいふいふい

向ふ石坂路を旅人のつら下るをいふ
玉首のまのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
人を極めつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ

つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ
つら下るをいふのまのつら下るをいふ

蛸 拂ふ木曾の石坂の小雨

蟬

壁 下り草てふまをいふ
蟬の毒

一睡夢裏精神千里をよす

藤の葉も一や明るも蚤須戸の蠅

目さかたうけハ

いんきんり 蠅も行くとも蚊の夕

芒棧

ひらりひらり藤起きもよみぬ草うらふ梅乃
白ひ芳しき黄昏の月鏡あはれちと花の
おとろしきとあまのつとふくくひあはる

を藤草うらふて夢つるあきた人青々く矢
せとあはれあま夏は枝葉おつとあまてヨを
透るも暑を暖くお便り少秋は名のおお
きハ黄葉をちりしとら雪のほこもり光
うす枯るれ枝を爪折て粥を煮る只こつれ
樹をいばせをちりしとら枇杷園をいばせ
つらねもま芒も五月雨さし降そひて足お
あし止もぬく又ちりしとらあはれちりしとら

あやし乃板投やりて芭の機と名つけえれを
行路難のつづひもなきて晴る社とおのへる
あはれ者小人句ふははつさうへんあはれ
携守て昼も敷屋つれまゝわらふ

納涼

まじしとるされる、軒を歩けり
漁火をうそへて嬢。そゝ負う部

楳老々門より少小船をうそへて

這ふ蟹の横より舟やるまゝみこふ
水とらとら山り静あやうふくもれハ茶を
たのしきけうあゝものも命ふかし
静あれら涼もた味もきつれら

對和樂

暑くぬく夏をさしをむら老れ
うふのこいひ合ふ中か硯押
出し句を伝ふありれらえんをうそへ

又多あつむと酒小残三平文ひひりき出ー枯魚
一臥灰ふらちくして志をー奥小入ぬ

そ〜凡々あけをそなきふれ日もさ〜

蓮

蓮の香や人も何ううぬ苔の庭
素堂不言や蓮ら痴人を照すを

清水

清水の汲て小木曾の蠅をワきけら

桂五亭夕貞見

夕顔 やま〜〜〜もさの友

夕立

申ふらちや黒はの梢あまら〜し

夕〜もちや露の賣る〜もる膳所町

雨〜も墨めち〜も〜まをワる國のた

り子不ー伯母のろ〜餅と乾夕立のまぬ〜

ふ〜といひ〜れを

雨乞巾 晴も 伊吹も ぬれり

得鏡一字

採ちのた 影をあり代むうらな

浄後

男ふさるる 芦をよおて後うら

